

Kitakyushu Global Pioneers における Start Up Program の成果と課題

—平成 25 年度入学生のデータから—

西出 崇*・永末 康介

1. はじめに

本稿の目的は、平成 24 年度に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択された北九州市立大学の「Kitakyushu Global Pioneers (以下、KGP)」の現段階におけるプログラムの成果を、定量的に検討することにある。本プログラムは、4 年間をかけてグローバル人材の育成を行うものであるが、ここでは 1 年生から現プログラムを利用できる最初の学生である平成 25 年度入学生の資料のうち、原稿執筆段階で一通りのデータが揃っている 1 年生向けに設置された「Start Up Program (以下、SUP)」について分析する。具体的には、TOEIC スコアの伸びに対して、SUP がどのような効果を及ぼしているのかを検討する。

グローバル人材育成プログラムの成果は、単純に英語運用能力のみで議論できるものではないが、グローバルに活躍する人材の基礎的素養として外国人とのコミュニケーション能力が求められる以上、英語力は重要な指標となる。本プログラムでは、その英語力を測定する指標として TOEIC スコアを用いている。TOEIC スコアのみで、英語での総合的コミュニケーション能力を計測できるわけではないが、利用可能な指標が TOEIC スコアに限られることから、ここでは TOEIC スコアを中心に分析を行う。

以降では、まず北九州市立大学のグローバル人材育成事業の概要を述べ、その後各種データの整理と分析を行う。データの分析は、入学時に実施しているプレイメントテストのスコア、1 年生前期の TOEIC スコア、1 年生後期の TOEIC スコ

* 北九州市立大学グローバル人材育成推進室

アを対象として、その分布や SUP の影響を検討していく。

2. 北九州市立大学グローバル人材育成事業の概要

北九州市立大学は、平成 24 年度に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業¹」の「タイプ B（特色型）」に採択されたことをうけて KGP というプログラムを立ち上げ、グローバル人材育成の取り組みを進めている。本プログラムでは、(1) 高度な語学力に裏付けられたコミュニケーション能力の高い人材、(2) 世界中で活躍できるモチベーションを持つ人材、(3) 多様な価値観を理解尊重し、自国の歴史・文化や地域の強みを発信できる人材、(4) 自分の意見をしっかり持ち、国際的な舞台でも主張・議論ができる人材、(5) 自らの志とリーダーシップを持って、国際的に活動できる実践力のある人材、という 5 つの人材育成目標を掲げ、各種の取り組みを行っている。

このプログラムは入学前教育から始まり、4 年間をかけてグローバル人材を育成する。入学前の段階では、AO 入試や推薦入試の合格者に対して KGP の内容を周知するとともに、e ラーニング教材などを提供することで、入学前からグローバル人材へのモチベーションを与えている。入学後は、1 年生向けに SUP が用意される。SUP では、正課の基盤教育科目におけるグローバル人材育成関連科目の履修を誘導するとともに、e ラーニングと連動した英語力アップの講座を提供し、KGP の出発点としてグローバル人材の第一歩を踏み出すための基礎を養成する。

本格的な KGP のプログラムは、2 年生以降に展開される。プログラムは、レベルや目的に応じていくつかに分かれている。上位層を対象に充実したプログラムが用意されるのが、副専攻として履修する「Global Education Program（以下、GEP）」である。GEP は、高度なグローバルビジネスリーダーの養成を目指す「Global Business Course」と、異文化理解と国際社会で活躍できるリーダーシップを養成する「Global Studies Course」の 2 つのコースに分かれている。前者は申請要件として 1 年生終了時の TOEIC スコアが 600 点以上、累積 GPA が 2.5 以上²が必要で、

¹ http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm（2014 年 12 月 20 日確認）

² Global Business Course を 3 年生の前期から履修する場合は、2 年生終了時に TOEIC スコアが 650 点以上、累積 GPA が 2.5 以上が条件となる。

後者は 1 年生終了時の TOEIC スコアが 550 点以上、累積 GPA が 2.5 以上³が必要となっており、比較的高いレベルを要求される。また、定員も前者が 30 名、後者が 20 名と少なく設定されており、修了要件も TOEIC スコアが前者で 800 点以上、後者で 730 点以上など比較的厳しいものとなっている⁴。

これに対して、中間層の学生を対象としたプログラムが「Global Standard Program」である。このプログラムは主専攻の範囲で履修することができ、申請要件も GEP よりは低く設定され、2 年生前期からの履修であれば TOEIC スコアが 470 点以上、3 年生前期からであれば 550 点以上となっており、定員も 130 名と比較的多い。また、これらのプログラムのように積極的目標としてグローバル人材を目指さない学生に対しても、英語力を養成するためのプログラムとして「Career English Program」を提供しており、レベルや目的に応じてグローバル人材を目指せるようになっている。これらの他にも、海外インターンシップや各種留学プログラム、海外語学研修なども KGP の事業に組み込まれており、総合的にグローバル人材育成を進めている。

本プログラムを 1 年生時の SUP から履修できるのは、平成 25 年度入学生からである。現時点で彼らは 2 年生の後期となり、SUP を終えて本格的な KGP のプログラムを履修している段階である。KGP の一連のプログラムの成果を評価するのは彼らが修了した後となるが、本稿ではその中間的な成果の確認のステップとして、KGP のプログラムを利用できる初年度の学生が一通り履修し終えた SUP の成果と課題について、入学時のプレイスメントテストや TOEIC スコアから検討する。

3. プレイスメントテスト

SUP の成果を検討するためには、参照点となる SUP 受講前の英語力を把握しておく必要がある。ここでは、入学時のオリエンテーションの際に本学の基盤教育センターが実施する日本英語検定協会の「英語能力判定テスト（以下、プレイスメントテスト）」⁵のスコアを、入学時の英語力の指標として用いる。ただし、外国語

³ Global Studies Course を 3 年生の前期から履修する場合は、2 年生終了時に TOEIC スコアが 600 点以上、累積 GPA が 2.5 以上が条件となる。

⁴ 詳細については、KGP の Web サイト (<http://international.kitakyu-u.ac.jp/kgp/outline/>) 及び、履修案内等を参照されたい。

学部および地域創生学群については、このプレースメントテストを受験していないため、SUP のクラス分けのために実施している、株式会社アルクの e ラーニング教材「Net Academy2」のテスト演習のスコアを用いる。したがって、入学当初の英語力については、外国語学部および地域創生学群とその他の学部については分けて検討する。

表1および表2に、それぞれ Net Academy2 のテスト演習とプレースメントテストのスコア分布について、学科・学類別（以下、まとめて「学科」とする。同様に、学部・学群についても「学部」とする）に基本的な統計量を示した。分布の形状を示す指標として尖度と歪度を示しているが、これらの値から各学科のスコア分布は概ね正規分布であるとみなしてよいようである。

表1の外国語学部および地域創生学群については、SUP の受講者のみがクラス分けのために Net Academy2 のテスト演習を受験しているため、SUP を受講していない者のスコアは含まれていない。スコアの分布をみると、当初から英語力が高いことが予想される英米学科で平均が高く、中国学科と国際関係学科にはあまり差がないように見える。そこで、サンプル数の少ない地域創生学群を除外して外国語学部の3学科のスコアの平均を分散分析で検討したところ有意な差がみられ ($F(2,157)=12.166, p<0.000$)、Tukey 法による多重比較から中国学科と国際関係学科との間には有意な差はなく、これら2学科と比べて英米学科の平均は有意に高いようである。

表2の経済学部、文学部、法学部については、SUP 受講者以外も含めた学年全体のスコアである。スコアの平均を学部内でみるとあまり差はみられないようであるが、学部間では一定の差があるように見える。そこで、ここでは学科別ではなく学部別に平均値の差を分散分析で検討したところ有意な差がみられ ($F(2,778)=40.553, p<0.000$)、Dunnnett C 法による多重比較から、学部の間でそれぞれ平均に有意な差があることがわかった。

外国語学部と地域創生学群のスコアは、SUP の受講者のみに限られるため非受講者との比較ができないが、経済学部、文学部、法学部についてはほぼ全員がブレ

⁵ ここでは「英語能力判定テスト」の中の「TEST B 英検2級・準2級・3級レベル」を利用している。このテストは筆記試験が35分、リスニングが約20分で、スコアは最大で0～680点までの範囲をとる。詳細については、日本英語検定教会の Web サイト (<http://www.eiken.or.jp/test/>) を参照されたい。

イスメントテストを受験しているため、SUP の受講の有無でスコアを比較できる⁶。この 3 学部で SUP を受講した者のプレイスメントテストの平均スコアは 482.5 点、非受講者は 450.3 点となり、この平均の差を t 検定で検討したところ有意な差がみられた ($t=-6.177, df=779, p<0.000$)。このことから、SUP は当初から英語力が比較的高い学生が受講する傾向にあるようである。

〈表 1〉学科別 Net Academy2 のテスト演習スコアの分布 (外国語学部・地域創生学群)

学 科	度数	平均値	中央値	標準偏差	尖度	歪度
英米学科	65	611.3	620	80.8	-0.106	0.099
中国学科	35	534.9	520	96.2	-0.319	0.435
国際関係学科	60	542.7	550	96.5	-0.302	-0.067
地域創生学類	7	388.6	360	112.5	-0.809	0.384
合 計	167	561.3	560	103.4	0.034	-0.258

〈表 2〉学部・学科別プレイスメントテストスコアの分布

学 科	度数	平均値	中央値	標準偏差	尖度	歪度
経済学部	293	440.9	441.0	77.6	-0.086	-0.180
経済学科	149	447.1	457.0	82.7	-0.103	-0.242
経営情報学科	144	434.5	433.0	71.5	-0.103	-0.176
文学部	226	493.1	493.5	56.3	-0.268	-0.182
比較文化学科	147	499.6	504.0	55.5	-0.391	-0.125
人間関係学科	79	481.1	476.0	56.2	-0.174	-0.287
法学部	262	455.4	462.0	61.5	0.825	-0.496
法律学科	183	454.6	462.0	61.4	0.986	-0.585
政策科学科	79	457.0	463.0	61.9	0.547	-0.300
合 計	781	460.8	469	69.9	0.305	-0.408

表 1、表 2 で使用したテストはその内容が異なるため両者のスコアを直接比較することはできないが、学部・学科の特性から予想される英語力の水準の相対的な上

⁶ ここでの SUP の「受講」とは、名簿上の SUP への登録の有無ではなく、出席状況から実際の受講の有無を判断して作成した変数である。

下関係とここでの集計結果が概ね一致するものであることから、これらのスコアが入学当初の学生の英語力をほぼ正しく測定できていると考えてよさそうである。これを踏まえて、次に KGP において英語力測定の指標として用いている TOEIC スコアについて検討を進めていく。

4.1 1 年生前期の TOEIC スコア

本学では 1 年生、2 年生の英語教育科目で TOEIC スコアを成績に組み入れたり特定の単位に読み替えたりする制度があるため、多くの学生が学期ごとに TOEIC テストを受験する。また、KGP では SUP の受講者に一定の要件を満たせば TOEIC の受験料の補助を行っている。

KGP では TOEIC スコアを、グローバル人材育成における英語力測定の 1 つの指標として利用している。1 年生前期の TOEIC テストは、ほとんどの学生が大学入学後に初めて受験するもので、TOEIC による英語力測定の第一の基準点となるスコアである。ここから、1 年生の前後期の SUP を経てどの程度 TOEIC スコアが伸びるのかが、SUP プログラムの効果を測定する 1 つの目安となる。ここでは、その参照点となる TOEIC スコアについて概観する。

スコアを見る前に、TOEIC テストの時期について言及しておく必要がある。というのは、1 年生前期に受ける TOEIC テストの受験時期が必ずしも入学直後ではないためである。KGP の TOEIC テスト受験料補助を受けるためには、指定された会場と実施日に受験する必要がある。平成 25 年度入学生の場合には、平成 25 年 7 月 6 日に学内で実施される TOEIC IP テストを受験しなければならない。ここでの分析の対象はこのスコアである。つまり授業が 4 月に始まり、SUP が 5 月上旬に開始されることから、このスコアは既に大学の英語教育をうけて約 3 か月が経過した段階ということになる。

このように、1 年生前期の TOEIC スコアは入学直後の英語力を測定しているわけではないため、SUP の効果を測定するための参照点として用いる際には注意を要する。この段階の TOEIC スコアは、正課の授業および SUP 受講生であれば SUP の効果も加えたスコアであるとみるべきだろう。TOEIC スコアの学習曲線の特性についての検討を別途行うべきであるが、一般に学習の初期段階ではその効果が顕著に表れることが多く、その点を考えれば、ここでの TOEIC スコアはいわゆる「初

期伸び」後の値である可能性が高い。入学から TOEIC テスト受験までの間にどの程度スコアが向上したのかをここでは正確に推定することはできないが、比較のための参照値とする場合にはこのことを念頭に置く必要がある。

〈表 3〉1 年生前期の TOEIC スコア分布（学科別）

学 科	度数	平均値	中央値	標準偏差	尖度	歪度
英米学科	98	651.1	650.0	110.4	0.238	0.095
中国学科	50	528.1	542.5	103.6	0.712	-0.002
国際関係学科	65	555.0	555.0	104.0	0.602	0.053
経済学科	131	371.0	365.0	109.2	0.369	0.687
経営情報学科	138	353.6	347.5	98.6	-0.251	0.397
比較文化学科	135	446.0	435.0	103.0	-0.336	0.167
人間関係学科	74	398.3	387.5	94.1	-0.146	-0.016
法律学科	170	376.4	370.0	99.8	-0.578	0.255
政策科学科	77	388.5	390.0	96.0	0.191	0.384
地域創生学類	—	—	—	—	—	—
合 計	941	433.9	415.0	138.6	0.079	0.575

※地域創生学類については受験者が少なく個人が特定される可能性があるため数値を伏せる

表 3 に、1 年生前期の TOEIC スコアを学科ごとに分けて統計量をまとめた。受験者数が非常に少ない地域創生学類を除けば、分布の形状はおおむね正規分布に従うとみなしてよいようである。スコアの平均については、プレイスメントテストでみた学科間の相対的な上下関係と概ね一致しており、学部・学科の特性から予想されるものである⁷。また、標準偏差もどの学科でも 100 前後の値となっているが、平均値との兼ね合いでいえば、標準偏差を平均値で除した変動係数は平均値が低いほど大きくなるため、よりスコアの高い英米学科の方が相対的には分散が少ないといえる。英語を学ぶ機会が少ない学科では、積極的に英語学習に取り組む者とそうではない者のスコアの差が開きやすいことが、相対的に分散が大きくなる要因として考えられる。

⁷ プレイスメントテストと 1 年生前期の TOEIC スコアの間には有意な相関があり、外国語学部および地域創生学群では相関係数（Pearson の R）が 0.601、それ以外の学部では 0.727 と高い数値となっている。

では次に、SUPの受講と1年生前期のTOEICスコアの関係を検討する。学部・学科を分けずに全体としてみれば、SUP受講者の方が有意にTOEICの平均スコアが高い。SUPの受講者の方が平均スコアが高い原因として、1つは途中段階ではあるがSUPの効果が挙げられる。しかし、先にSUPの受講者は非受講者よりもプレイメントテストの平均スコアが有意に高いことを示したように、当初から英語力が高い者がプログラムを受講していることも、平均スコアの差を説明する要因として挙げられる。SUPの受講期間を考えれば、主要因は後者だろう。ここでのSUP受講の有無による差をみる際には、この点に注意しなければならない。

〈表4〉SUP受講と1年生前期のTOEICスコア（学科別）

学 科	前期 SUP	N	平均値	標準偏差	受講有無による
					平均値の差の検定 (t検定)
英米学科	非受講	37	650.0	123.4	t=-0.074, df=96, p<0.941
	受 講	61	651.7	102.8	
中国学科	非受講	17	547.4	132.8	t=0.942, df=48, p<0.351
	受 講	33	518.2	85.6	
国際関係学科	非受講	15	543.0	59.6	t=-0.506, df=63, p<0.614
	受 講	50	558.6	114.3	
経済学科***	非受講	97	354.4	101.8	t=-3.038, df=129, p<0.003
	受 講	34	418.5	117.2	
経営情報学科**	非受講	88	337.4	97.9	t=-2.598, df=136, p<0.010
	受 講	50	381.9	94.3	
比較文化学科***	非受講	57	402.1	87.3	t=-4.526, df=133, p<0.000
	受 講	78	478.0	102.3	
人間関係学科	非受講	48	386.1	86.5	t=-1.524, df=72, p<0.132
	受 講	26	420.8	104.9	
法律学科**	非受講	133	366.2	98.3	t=-2.561, df=168, p<0.011
	受 講	37	413.0	97.6	
政策科学科	非受講	55	379.5	91.4	t=-1.315, df=75, p<0.192
	受 講	22	411.1	105.2	
地域創生学類	非受講	-	-	-	-
	受 講	-	-	-	
全体***	非受講	549	395.7	127.8	t=-10.475, df=939, p<0.00-
	受 講	392	487.32	135.4	

※地域創生学類については受験者が少なく個人が特定される可能性もあるため数値を伏せる

※ SUP 受講の有無によって有意な差がある学科に印をつけた

***:p<0.01, **:p<0.05, *:p<0.10

学科別にみると、SUP の効果がもう少しみえてくる。最も平均スコアが上位にある外国語学部の英米学科、中国学科、国際関係学科では、SUP の受講の有無によって平均スコアに有意な差は見られない。詳細に分析をしなければ結論を出すことはできないが、これらの学科では、既に英語力が高いためにあえて SUP に登録しないことや学習の初期段階の効果が表れにくいこと、正課の英語科目の影響が大きく SUP 受講の有無によって差が出にくいということがあるのかもしれない。これに対して、経済学科、経営情報学科、比較文化学科、法律学科では、SUP の受講有無によって平均スコアに有意な差がみられる。これら学科では、当初から英語力が高く英語学習に積極的な者が SUP に登録し、さらに SUP の効果によって差が開いているといえるかもしれない。

5. 1 年生後期の TOEIC スコア

続いて 1 年生後期の TOEIC テストについてみる。後期の TOEIC テストについても受験料補助の対象となる受験日が指定されており、平成 25 年度入学生では平成 25 年 11 月 30 日、12 月 14 日、平成 26 年 1 月 11 日となっている。後期は、TOEIC テストを複数回受験する学生もいるため、複数回受験した者については最

〈表 5〉 1 年生後期の TOEIC スコア分布 (学科別)

学 科	度数	平均値	中央値	標準偏差	尖度	歪度
英米学科	103	651.1	645.0	110.6	-0.271	0.136
中国学科	47	538.9	550.0	92.1	-0.468	-0.193
国際関係学科	73	558.3	565.0	101.3	0.360	0.185
経済学科	139	385.0	380.0	118.1	0.463	0.629
経営情報学科	136	377.1	365.0	93.8	0.913	0.643
比較文化学科	136	453.3	455.0	104.8	-0.250	-0.060
人間関係学科	67	432.7	425.0	105.0	-0.197	0.174
法律学科	162	390.9	387.5	91.4	-0.422	0.252
政策科学科	72	399.3	395.0	89.7	-0.661	0.133
地域創生学類	0	—	—	—	—	—
合 計	935	449.9	430.0	135.3	0.042	0.531

高点を分析に用いている。

表4に、1年生後期のTOEICスコアの分布についての基本的な統計量を学科別にまとめた。前期からの変化については次節で検討するため、ここでは分布の位置と形だけを概観する。各学科の平均スコアの相対的な上下関係は、概ね前期と変わらないようであるが、学科ごとに平均スコアが前期と変化したところと、そうではないところがみられる。この点については後に検討する。分布の形は、前期と同様にほぼ正規分布に従っているとみなしてよいだろう。

では、後期のTOEICスコアについてもSUPの受講の有無によって差があるかを検討する。後期のTOEICスコアには、前期SUP、後期SUP、および正課の英語教育の効果が影響していると考えられる。このうち、正課の科目についてはいずれの学生でも基本的に条件が等しいと仮定すると、後期のTOEICスコアに影響しうる要因は前後期のSUPのみとなる。SUPを受講した学生は、前期のみ受講した者と後期まで継続して受講した者に分かれるが⁸、ここでは前後期の一連のプログラムとして企画されたSUPの効果を検討するために、後期まで継続した者とそうではない者（前期SUPのみ受講した者とSUPを全く受講していない者）でTOEICスコアを比較する。

後期SUPまで継続して受講した者は、学年全体で150名程度とかなり少なくなる。前期SUPでは約400名が受講したことを考えると、後期になる段階でかなり受講者が減少していることがわかる。前期の途中でも当初の受講登録者数から徐々に減少しており、後期に大幅に受講者が減少することは、SUPの課題である。学生が受講をやめる理由等については、今後の調査・分析で検討するとして、SUP受講者が当初から大幅に減少していくなかで、最後まで受講を続けた学生は英語学習に積極的で、意欲的に学習に取り組む者であると考えべきだろう。

これを踏まえて、SUPの受講の有無に分けて後期のTOEICの平均スコアをまとめた表6をみると、全体では表4で示した前期SUPの受講有無による前期TOEICスコアの平均の差よりも、後期の差の方が広がっている。学科別にみれば、前期の段階では差がみられなかった英米学科や国際関係学科などで顕著な差がみられるようになっている。この差の広がりには、先に指摘した受講者数の減少を踏まえれば、

⁸ 制度的には後期SUPのみを受講することも可能であるが、そのような学生はほとんどいないため、ここでは無視する。

意欲的に英語学習に取り組む者が残ったために SUP の効果が表れやすくなったことに加え、そのような学生は一般に英語力が当初から高いと考えられるために非受講者よりもスコアが高くなっていることなどが要因として考えられる。少し見方を変えれば、積極的に英語学習に取り組む学生が選抜された結果であるといえる。

このような主体的な学生を選抜して、より高度な目標に向けて育成することは、グローバル人材育成の 1 つのあり方であるといえるし、そうした方向では一定の成果を上げていると考えられる。しかし、他方で SUP に登録したものの最後まで受講しなかった（できなかった）者への対処も検討する必要があるだろう。こうした

〈表 6〉 SUP 受講と 1 年生後期の TOEIC スコア（学科別）

学科コード	後期 SUP	N	平均値	標準偏差	受講有無による
					平均値の差の検定 (t 検定)
英米学科***	非受講	68	612.4	99.5	t=-5.654, df=101, p<0.000
	受講	35	726.3	91.5	
中国学科	非受講	34	543.4	90.8	t=0.531, df=45, p<0.598
	受講	13	527.3	98.0	
国際関係学科***	非受講	44	523.9	84.8	t=-3.917, df=71, p<0.000
	受講	29	610.5	103.2	
経済学科***	非受講	133	377.3	113.6	t=-3.775, df=137, p<0.000
	受講	6	555.0	89.3	
経営情報学科*	非受講	125	372.7	92.0	t=-1.868, df=134, p<0.064
	受講	11	427.3	103.9	
比較文化学科***	非受講	109	437.6	97.6	t=-3.68, df=134, p<0.000
	受講	27	516.9	110.4	
人間関係学科***	非受講	62	422.2	98.5	t=-3.063, df=65, p<0.003
	受講	5	563.0	104.6	
法律学科*	非受講	149	387.1	91.1	t=-1.796, df=160, p<0.074
	受講	13	434.2	86.6	
政策科学科	非受講	64	395.5	79.8	t=-0.631, df=7.489, p<0.547
	受講	8	430.0	152.1	
地域創生学類	非受講	-	-	-	
	受講	-	-	-	
全体***	非受講	788	427.4	120.7	t=-11.239, df=185, p<0.000
	受講	147	570.5	145.3	

※ SUP 受講の有無によって有意な差がある学科に印をつけた
***:p<0.01, **:p<0.05, *:p<0.10

学生は、少なくとも任意のプログラムである SUP に自らの意志で登録した者であり、グローバル人材に向けての一步を踏み出しているといえる。これらの学生に学習の動機づけを行い、次のステップに導くことができれば、グローバル人材育成の裾野が広がるだろう。それが、今後の SUP の大きな課題の 1 つであるといえる。

6. SUP と TOEIC スコアの向上

最後に、SUP によるスコアの向上について検討する。SUP の効果の検討に先だって、まず前期と後期で TOEIC スコアがどのように変化したのかをみる。学年全体の前期 TOEIC の平均スコアは 432.1、標準偏差が 135.9 で、後期 TOEIC の平均スコアは 449.8、標準偏差が 135.2 であり、前後期の平均スコアの差を t 検定で検討すると、両者には有意な差がみられる ($t=-7.097$, $df=869$, $p<0.000$)。このような全体のスコアの前後期での変化を踏まえて、SUP が前後期のスコアの変化にどのように影響しているのかを検討する。

前期から後期にかけての TOEIC スコアの変化を検討するために、ここでは後期 TOEIC スコアと前期 TOEIC スコアの差をとり、それが SUP の受講によって差が生じるのかを検討する。前後期の TOEIC スコアの差の分布を学年全体でみると、平均が 17.7、標準偏差が 73.4 となり、20 ポイント弱のスコア向上がみられる。これを、SUP の受講の有無によって分けてみると、前後期とも受講した者の平均が 14.8、標準偏差が 74.0、前期のみ受講した者の平均が 15.5、標準偏差が 73.4、いずれも受講していない者の平均が 18.4、標準偏差が 72.7 となる⁹。単純に前後期の変化量の平均だけを見ると、SUP を受講していない者の方がむしろスコアが向上しているようにみえるが、分散分析で 3 つのグループの平均の差を検討すると有意ではないため ($F(2,861)=0.195$, $p<0.823$)、SUP の受講の有無によって差はないと考えられる。

このことから、TOEIC スコアの単純な変化という意味では、SUP 受講が TOEIC スコアを押し上げるという効果はみられないといえる。だが、この点だけに注目して SUP に効果がなかったと結論づけることはできない。

まず考慮すべきなのは、TOEIC の受験時期と前後期で比較する期間の問題であ

⁹ 後期 SUP のみ受講している者もいるが、ごく少数であるためここでは分析から除外する。

る。1 年生前期の TOEIC テストのスコアは、先にも指摘したとおり入学直後の値ではなく、前期 SUP や正課の英語教育がある程度進んだ時期のものである。学習の初期段階ほど「初期伸び」としてその効果が顕著に表れ、それがひと段落するとしばらく停滞するといったことはしばしば観察される。そして前期の終盤で受験した TOEIC スコアは初期伸び後の数値で、後期の TOEIC テストを受験する時期がその後の停滞の時期に重なるとすれば、SUP によるスコアの向上が数値として観察できない可能性がある。初期伸びとその後の停滞、といった学習曲線のモデル以外にも、教育の開始から効果が表れるまで一定期間を要する、といったモデルを考えることも可能かもしれない。すなわち、教育効果が出始めるのに半年から 1 年足らずの期間では短すぎる、という見方である。いずれにしても、学習曲線とスコアの測定時期や期間については検討が必要である。

次に考慮すべき点は、「伸びしろ」の問題である。TOEIC スコアの上限は 990 点であるが、スコアが上限に近づくほど伸びしろが少なくなるため、スコアが上昇しにくくなる可能性である。また、一定以上のスコアに達すると、学習の難易度が飛躍的に上がることも考えられる。いわゆる、学習の「壁」である。そうすると、同じだけの時間や努力を投入しても、スコアが低い者と高い者とでは、後者の方がスコアの向上の幅が目減りしている可能性がある。だとすれば、各学生の前期の段階での TOEIC スコアの水準も考慮に入れる必要があるだろう。

7. TOEIC スコアの向上を規定する要因

そこでこれらの点を踏まえて、TOEIC スコアの前後期の変化の規定要因について、重回帰分析で検討する。具体的には、前後期の TOEIC スコアの変化を目的変数とし、入学当初の英語力の指標となるプレイズメントテストのスコア、当初の TOEIC スコアの参照点となる前期 TOEIC のスコアおよび SUP 受講の有無を説明変数とするモデルを検討する¹⁰。

表 7 に上記モデルの推定結果を示す。まず、モデルは前後期の TOEIC スコアの変化を有意に説明しており、その分散の約 1/4 を説明していることがわかる。モデ

¹⁰ 外国語学部と地域創生学群はプレイズメントテストを実施していないため、データの構造上、この分析には両学部のデータは含まれない。

〈表 7〉 TOEIC スコアの変化を目的変数とした重回帰分析

説明変数	ベータ
プレイスメントテストスコア	0.530 ***
前期 TOEIC スコア	- 0.774 ***

SUP 受講 (Ref. SUP 受講なし)	
前期 SUP のみ受講ダミー	0.022
前後期 SUP 受講ダミー	0.102 ***

R ²	0.267 ***
Adj. R ²	0.262 ***
N	667

***:p<0.01, **:p<0.05, *:p<0.10

ルの説明力は必ずしも大きいとはいえないが、TOEIC スコアの変化を規定する要因として、これらの変数は一定の影響があるといってよいだろう。個別の説明変数をみると、プレイスメントテストのスコアは、TOEIC スコアを有意に押し上げる効果がみられる。他方で、前期 TOEIC スコアも有意な影響を及ぼすものの、係数の符号が負になっていることから、TOEIC スコアの伸びを押し下げていることは興味深い¹¹。

前期の TOEIC スコアが前後期にかけての TOEIC スコアの変化を押し下げる方向に作用しているのは、先に検討した「伸びしろ」の問題と関係していると考えられる。やはり、前期の TOEIC スコアが高い者ほどスコアの伸びが頭打ちとなっていることなどが、このような結果をもたらすのだろう。したがって、前期の TOEIC スコアが高い者ほど、前後期のスコアの伸びが目減りしていると考えべきだろう。その一方で、プレイスメントテストのスコアは、TOEIC スコアを押し上げている。この点の解釈にはさらなる検討を要するが、ここでは暫定的にプレイスメントテストのスコアを基本的な英語力と捉え、TOEIC の学習効果が当初の英語力によって左右されていると解釈しておこう。

では、焦点である SUP の効果を検討していこう。ここでは SUP の受講を、受講

¹¹ プレイスメントテストのスコアを説明変数から除外し、外国語学部、地域創生学群も含めて検討しても、前期の TOEIC スコアが有意に TOEIC スコアの伸びを押し下げている。また、後述する SUP の影響についても、基本的な構造は変わらない。

なし、前期のみ受講、前後期とも受講に分け、受講なしを基準にダミー変数を作成してモデルに投入した。分析の結果をみると、前期 SUP のみの受講では TOEIC スコアの変化に有意な影響はみられないが、前後期を通して SUP を受講した場合には、TOEIC スコアを有意に押し上げる効果が確認できる。先に SUP を受講しても TOEIC スコアの平均的な伸びには差がないことをみたが、前期時点での TOEIC スコアの水準を統制することで、SUP がそのスコアを有意に押し上げる効果が確認できる。つまり、ここでも当初の TOEIC スコアの水準の高さによってスコアの伸びが目減りしていたために平均すると伸びが見えにくくなっていたことが裏付けられたといえるだろう。したがって、SUP の効果として TOEIC スコアの変化をみる場合には、単純に受講の有無で分けて平均を比較するだけでは不十分である。プログラムの成果は全体を均した平均で議論すべきではなく、TOEIC スコアや英語力などの層別に検討する必要がある、SUP および KGP 全体のプログラムの展開もターゲットを分けて構成する必要があるのではないだろう。

このように、SUP の受講によって TOEIC スコアが押し上げられる効果を確認したが、これをそのまま SUP そのものの教育効果として受け取ることはできない。それは、SUP による英語学習に積極的な学生の選抜効果について考慮する必要があるためである。すなわち、英語学習に積極的に取り組み TOEIC スコアを伸ばすことができる学生が後期まで SUP を受講し続けたため TOEIC スコアの伸びが観察された、という逆方向の因果関係を考えなければならない。このことは、前期 SUP のみを受講しても TOEIC スコアの伸びにはつながらず、前期で多くの学生が離脱していることからもうかがえる。前期の SUP は、受験料の補助や入学時のオリエンテーション等で強く受講を誘導しており、また特に 1 年生の前期ということもあり、単位がなくとも登録したプログラムにとりあえず出席し続ける学生も多いと考えられる。しかし後期になると、このようなあまり主体的ではない学生がプログラムから離脱し、意欲の高い学生だけが残るため、結果として後期まで継続した SUP の受講がスコアの伸びにつながっていると考えられる。

このように考えると、SUP の内容には TOEIC スコアを向上させる効果があると思われるが、その効果が届いているのは英語学習にある程度積極的な学生に限られているといえる。SUP を KGP のプログラム全体のなかでどのように位置づけるのかについては議論が必要であるが、グローバル人材育成の裾野を広げる必要があるとすれば、「スタートアップ」の位置づけを見直す必要があるかもしれない。現状

では、入学時のオリエンテーションでの広報や TOEIC 受験料補助などで比較的広く学生を KGP に捉えることには成功しているといえるが、英語力が高い上位層が残留する一方で量的に多数を占める中間層が SUP の途中段階で離脱している。任意のプログラムである SUP に登録した学生は、グローバル人材に向けて一步踏み出していることは確かであるが、中間層においてその一步から次のステップへの動機づけがうまくいっていない可能性が高い。グローバル人材に向けて、どのように「スタートアップ」させるのが、問われているといえる。

8. まとめ

本稿では、平成 25 年度入学生に関する利用可能なデータから、KGP プログラムのカリキュラムにおける 1 年生向けプログラムである SUP の効果について、TOEIC スコアを指標として検討してきた。データが十分に整理されていない中で、限られた変数のみを用いた予備的な分析であるが、現状の SUP の成果と課題について一定の知見が得られた。現状として、SUP が TOEIC スコアの向上という点で大きな成果を上げているとはいいがたいが、ここでの分析から一定の成果も確認できた。

平成 25 年度入学生は、KGP のプログラムを 1 年生から利用できる最初の学生であり、SUP のあり方も手探りの状態である。KGP のプログラム全体として見れば、SUP の修了は初年度を終えたばかりの段階であり、4 年間で完成するプログラムの中では導入部に過ぎないことを考えれば、具体的な成果が表れるまでにはもう少し時間が必要だろう。したがって、TOEIC スコアの伸びのような端的な指標として成果が見えづらいことは、現時点ではあまり大きな課題ではない。むしろ、ここで得られた知見は、プログラムの問題点に関するもので、今後の SUP のあり方と 2 年生以降に続くより専門的なプログラムの内容の改善に資するものである。

現状の SUP は、TOEIC スコアの向上に重点を置く講座が中心となっており、グローバル人材のビジョンを示すことや学習の動機づけの面が手薄になっているといえる。学生に将来のビジョンを持たせ、それに向かって学習を動機付けることは容易ではないが、効果的なグローバル人材育成のためには、プログラムの内容や構造を今以上に工夫する必要があるだろう。例えば、TOEIC 講座とは別にグローバル人材育成のビジョンを伝えるようなセミナーやイベントを開催することや、TOEIC

Kitakyushu Global Pioneers における Start Up Program の成果と課題
—平成 25 年度入学生のデータから—

講座自体の内容の工夫などが考えられる。また、プログラムの構造という面では、前後期の境目で多くの学生が離脱していることなどを踏まえて、補助制度の内容や条件、前後期の継続性を持たせるような工夫などが必要だろう。

ここでは、SUP の効果に焦点をあてて分析を進めてきたが、KGP のプログラム自体は 2 年生以降も継続している。今後も受講生のデータを収集蓄積し、プログラムの効果の測定や改善に向けて、継続的に検討を行いたい。

